



50周年記念号

発行責任者 大ヶ谷戸小田中町会長 長勝
編集 町会広報部
印刷 印刷



大ヶ谷戸小田中町会
五十周年慶祝記念を迎えて

町会長 志村 勝

私たちの町会が本年五十周年を迎えますことを皆様と共に喜びたいと思います。
私たちの町会は、大戸地区の中にあって一五〇〇世帯を越える大きな町会として、皆さまの協力をいただきながら今日まで様々な活動に取り組んでまいりました。
あらためて日頃のご支援とご協力に對し町会を代表し心より御礼申し上げます。



小田中町内会の誕生
50周年に想う

中原区長 持田 一成

日頃から、中原区の区政の推進に大きな貢献を頂いておりますことに、心からの敬意と感謝を申し上げます。
とりわけ、小田中町内会の皆様方には安心・安全・安住と云う区民の皆様にとりまして最も大切な活動を、他の町会に先駆け実践していただいております。
さて、先日、志村会長さんから、今年に町会結成50周年に当る事から、記念の会報を発行するので、地元で生まれ育った区長として祝辞を

くりするほどきれいな二ヶ領用水の支流でその水を生活用水として利用していたことなどが懐かしく語られたそうです。
また、武蔵小杉駅周辺には昭和二十八年に旧・中原公民館が完成し、三十四年には駅前バスターミナルができ、三十七年に中原図書館の開館や、小杉駅前には横浜銀行も開店したことなど公共施設や経済活動に必要な施設が次々と誕生しました。

さて、現在の町会の発展を思うとき、多くの皆さまが、今日まで町会のために頑張って戴いた記録も残っており、

代初期に徳川幕府が、政治の安定のため米の量産を図る必要が有り、多摩川の沖積地で養分が豊富な地質の小田中地区に白羽の矢をたてたことが記されております。
今更ながら納得させられず思いますが、小田中町会も歴史が示すように、当時は数軒の農家と家作、それに4・5軒の商店がある程度でした。
しかし一方では、隣近所との付き合いは、親戚以上で、相互扶助の社会で成り立っていました。
そして町会を二分する川では、蛭が良く取れたことを想い出します。
多分、最近お住まいになられた会員の方には想像もつかないことでしょう。
しかし、お招きを受けた

そのご努力に對し心より感謝申し上げます。
いま、私たちの地域では、今までに経験したことのない課題が山積みされています。
超高齢化社会の到来や、少子化・子育て問題、いつ起こってもおかしくないといわれる災害に對する取り組みなど、万全の準備が求められます。
これらの諸問題に真剣に取り組んで参りたいと思っております。
これからの諸先輩が築いてくださったよき伝統を守りつつ安全で住みよい町会を目指しあらたなスタートを切ってまいります。

十一月三日の催しは、記念式典やイベントなど盛りだくさんの内容です。
尚、大ヶ谷戸出身の持田中原区長、大ヶ谷戸地域の他の町会長の皆さまにご参加いただき楽しい催しにしたいと思っております。
どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

今年の祭礼の際に感じましたことは、今も脈々と続く地元の連帯感でございます。
やはりこのことが、街を創る上で一番大切なことなんだと実感いたしました。
区長として掛け替えのない教養を頂き誠に有難うございました。
是非、小田中町会の皆様には、今後ともリーダーとして申し分のない志村会長の下、大ヶ谷戸、延いては中原区の旗頭として活動頂きますようご期待申し上げます。
終りに、このような投稿の機会を頂きました事に感謝致しますと共に貴町会の限らないご発展をお祈り致します。
有難うございました。

こども会の歩み

会長 渡辺 信夫

一、昭和四十年、他の町会が子供会活動をしている話を聞き、中村和子様・齋藤美代様が町会に提唱し、初代こども会会長として黒沼豊太郎氏を中心に活動が開始されました。
一、昭和四十四年こども会会則が施工されました。
一、昭和四十二年第一回運動会が開催され現在に至る。
一、昭和四十八年第一回餅つき大会が実施され現在に至る。
一、昭和四十五年野球部が木村昭伍氏監督を中心に創部され、現在は齋藤幸次氏監督を中心に活動を続けております。
一、昭和五十五年ドッチボール部が岸義雄氏監督を中心に創部されましたが、現在監督の後継者が不在のため、休部しております。
一、中原区子ども会連合・大戸地区子ども育成会に入会。
それぞれが会が催す各種の行事に参加。運動部においては、大ヶ谷戸大会・大戸大会・中

各部の活動の
おいたち、いろいろ！

大ヶ谷戸小田中町会では四〇年前まで作られた「松寿会老人クラブ」に入りたい方々だけ参加されておりました。
平成十二年に大ヶ谷戸・小田中町会独自の老人会「すみれ会」が結成されました。

すみれ会の歩み！

会長 黒沼 久子

会は町会より助成金をいただき町会の組織の一つとして活動しています。
初代会長は小林幸悦さんです。
年々会員も増加し、現在では五二名の方が参加しています。
会運営にあたっては、みなさんのご要望を取り入れ、親睦を中心としながらも、旅行・誕生会などを通して、人生経験などを語り合いながら楽しい会にするように努めています。
一方、市区老連とも協力し合い、諸行事にも参加して、自分を広くする機会ともなるようにとめています。
未だ、加入されていない方々、是非会に参加されて共に楽しめられますことを心からお勧めいたします。



中原区連旗

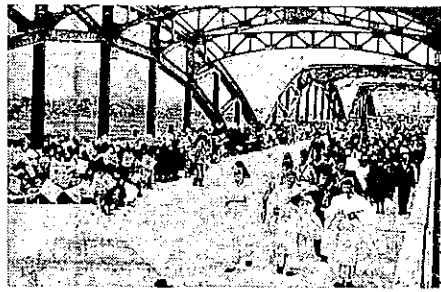
★我が国は現在少子化による問題で各方面で話題になっておりますが、我が子ども会においても、各行事の子供たちの参加率は低下する一方で、その影響が大きく出ております。
ご父兄は子ども会の趣旨にご理解を頂き子ども達の多くの参加にご協力をお願いいたします。

婦人部発足
50周年

婦人部長 齋藤 美代

婦人部は昭和二十九年に発足しました。
初代部長は中里あけみ様、二代中島啓子様、次が高島敏子様、平川美代様、齋藤キヨ様、齋藤シケ様の諸師を始め多くの役員の方によって、良いレールを敷いていただきました。
初代の頃は婦人の地位向上を目指した活動が重視され、祭礼の折華々しい生花の展示等も行われました。
また、その後は良い品をより安価で販売することも行い、手数料は、婦人部の活動に当てられました。

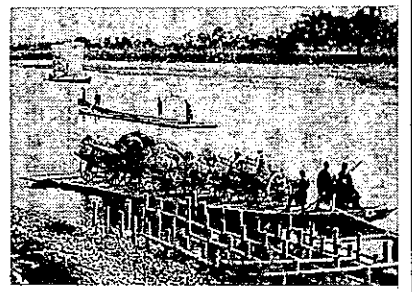
当時、わたしは機械編みに役頭しておりましたので毛糸を沢山買わせていただき、今でも着用している品もあります。
また、その頃から親睦や社会見学なども年々定期的に行われるようになりました。
わたしは齋藤シケ様の後、四半世紀以上に渡り婦人部長を勤めさせていただきました。
おかげで、市・区役所行政警察・消防・東電・東京ガスなどのご協力も得て、諸施設の見学や講習会、観劇など数多くの活動を実施することができました。
ここに改めてみな様に心から感謝いたします。
情報提供したくださった方々
田村豊子様・平川美代様
黒沼久子様



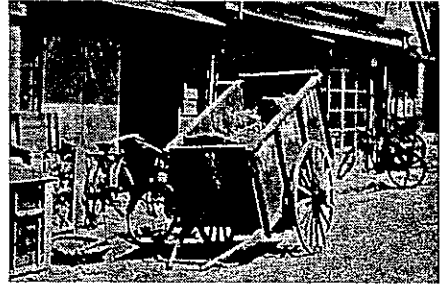
待望の丸子橋渡り始め式 (昭. 10)

# 写真で見る ひと昔の中原

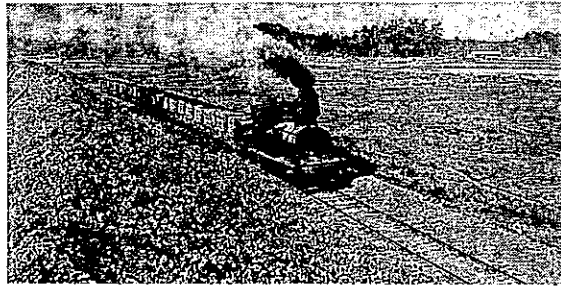
## 生活に欠くことが出来ない 水・交通・ゴミ・し尿はどうしたか？



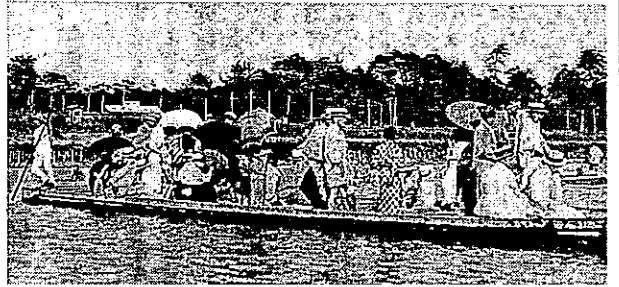
丸子渡船場 (大. 10)



川崎市で初めて使われたゴミ収集車 (昭. 16)



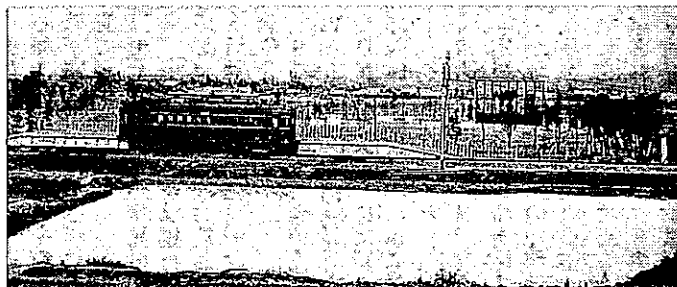
多摩川改修工事に使われた蒸気機関車 (大. 10)



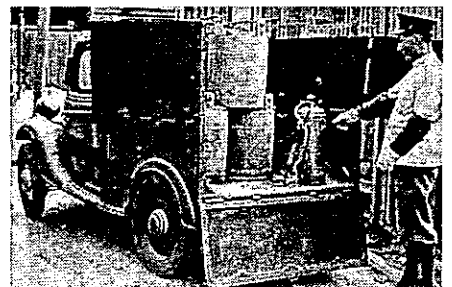
船頭が両はしに乗って人と自転車が渡る (大. 14)



大谷戸小学校建設前の畑地 (昭. 40頃)



小杉駅付近を通る南武線 (昭. 2)



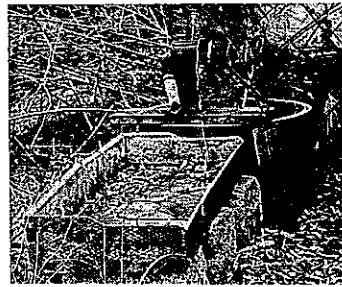
し尿収集車 (昭. 16)

今から五〇年前、戦後一〇年、廃墟からようやく立ち直り、互いに自分の生き方や自分の町を見直そうとした時、わたしたち町会が誕生しました。しかし、当時の人々の生活は、いや、それ以前のわたしたちの中原の人々はどうだったのでしょうか

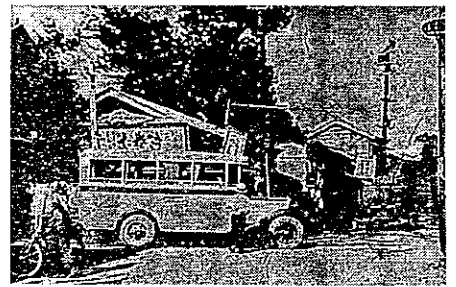
わたしたちの生活を支える水は、また交通手段は、また今どこの都市でも悩みのたねであるゴミやし尿の処理は、その実態を写真で見ることが出来ます。

そして、この歴史をふり返り、一人一人の努力が、今また求められています。

○写真提供―羽田猛様(元校長) 文・写真構成(石栗正夫)



大正・昭和と使われた井戸(朝山家のもの)



はじめて走るバス (昭. 2)

戦後、農地解放がされたことや、農家の分家、また家作が進出してきて、現在のような街が形作られました。

南武線、当初は単線で、奥多摩川の石灰石を運搬していましたが、人口増加に伴い、客車が走るようになりました。

戦後の急激な変化はだれも、予想できませんでしたが、ともかく町会の発展には目を見張るものがあります。

昭和二年から五年当時は、鳶職として一日、十時間働いて手間賃が一円、当時バットというたばこの一箱の値段が六十銭だったと思います。

私の十代の頃は、庭から千坪まで一面水田で、狐火さえ見られ、それはそれは美しい田園風景でした。

戦前(大平洋戦争)は大ヶ谷戸全体で六十軒ほどの農家があり、当町会の農家は十七軒でした。我が家の脇を流れる二ヶ領用水の支流では、鯉、鮎、もずくがに、鮒、どじょうなどが生息し、米とぎ、風呂水など生活用水として利用していたことが今でも懐かしく思い出されます。

今の時代では信じられないかも知れませんが、そのくらい川の水は、清くに澄んでいたのです。

**町の今昔・町会の誕生**  
ごほれ話・あれこれ!

**我・自慢のふる里**  
「おだなか」

加藤 一男 (九十一歳)

昭和二年から五年当時は、鳶職として一日、十時間働いて手間賃が一円、当時バットというたばこの一箱の値段が六十銭だったと思います。

私の十代の頃は、庭から千坪まで一面水田で、狐火さえ見られ、それはそれは美しい田園風景でした。

戦前(大平洋戦争)は大ヶ谷戸全体で六十軒ほどの農家があり、当町会の農家は十七軒でした。我が家の脇を流れる二ヶ領用水の支流では、鯉、鮎、もずくがに、鮒、どじょうなどが生息し、米とぎ、風呂水など生活用水として利用していたことが今でも懐かしく思い出されます。

今の時代では信じられないかも知れませんが、そのくらい川の水は、清くに澄んでいたのです。

**編集後記**

○会報「町会五十周年記念特集号」が刊行されました。

五十周年という記念すべき節目を町会のみならず共に喜びたいと思います。

○今回の会報にお忙しい中、中原区長持田一成様よりお祝いの言葉をいただきました。心から感謝いたします。

○また、元川崎市の校長を勤められた羽田猛様より、貴重な写真をお借りすることが出来ました。

来「写真で見るひと昔の中原」を紹介することが出来ました。

○町会の各部の活動も活発に行われています。それはだれよりも、この町を愛し、この町に住むことを喜びとし、誇りに思っているからです。

○この特集号を編集するにあたり「先人のご協力によって今日の大ヶ谷戸・小田中町会があるんだなあ。」としみじみ知ることが出来ました。

これからは町民がさらに一致して住み良い町に発展させていきたいと思います。

◇広報委員  
田村 和子 黒沼 久子  
岡村 昇 石栗 正夫

田村さんは昭和三年東京から上小田中に越されました。小杉駅で東横線から南武線に乗りかえ、その違いにはびっくりされたそうです。

車両のきたなさを、乗っている人々の服装や態度「大へんな所に来た。」と思われたそうです。はえやかがいっばい。南武線中原車庫の近くには大きな池があって、かえるがおり、いつも大合唱。「時にはそのかえるが家まで上がって来た」とか。また、「雨が降ると水たまりが多く出来て、長靴でないと歩けなかった。」とも聞きました。

こうした先人の努力の上に今の町会があるのです。

聞き手・文責(石栗正夫)

**田村豊子さん(82歳)に聞く。**

「会報は『みんなで助け合ってやりましょう。』とおっしゃたことを今でも覚えています。」となつかしげにお話しされました。

当時町会といっても、これとした活動はなかったようでした。ただ、その中で婦人部だけは役員同士で活動していました。「中でも記憶に残っているのは関神社の清掃でした。大きな掃きと塵取りを持って三ヵ月に一回ほど作業しました。」と、懐かしげに話してくださいました。

「通勤の方々は、長靴をはいて家を出て、大通りに出てから革靴にはきかえられた。」とおっしゃっていました。

三八年、南雲保さんが会長になられた時「町の発展のために相談したいことがある」ということで会合をもたれました。「その時、たまたま出席したのが機会となり、三八年に組織された婦人部の仕事をすすめるようになりました。」